

日  
論  
展  
B  
一  
九  
七  
六  
年  
六  
月  
号

# の観る中国の政情

中 嶋 嶺 雄

(東京外国語大学助教授)

◀ 社会科学学術情報研究所の前に立つ筆者



1

三度目のソ連

羽田空港を午後二時半の定刻に飛び立ったアエロフロートの五八六便は、予定かっきり十時間の飛行のち、モスクワのシェレメチエヴォ空港に着いた。去る二月八日の夕刻七時頃であった。雪のモスクワはやはり寒かったが、私にとってモスクワがこれほど近い

と感じたことは初めてだった。最初にソ連を訪れた一九七〇年夏は、ちょうど私が香港に留学しているときであり、モスクワ大学で開かれた国際歴史学会に出席するためであったが、香港とソ連とはいっさい外交関係がないだけに、ヴィザの取得その他で煩雑なことが多く、しかも、パキスタンのカラチ経由でタシケントへ入境したためか、カラチ発のアエロフロート機は正午の予定が深夜となり半日以上も遅れる始末であった。そのうえ中央アジア各地を転々としてモスクワへ入ったためか、モスクワの遠さをいやというほど感じさせられた。二度目は、一昨七四年の暮れもおしせまったときで、明るる新年早々、モスクワからモンゴルのウランバートルに達し、北京まで国境を越えての縦貫旅行に成功したときであった。このときは、天候のせいもあろうが、やはり羽田発のアエロフロート機がモスクワ空港には着陸できず、レニングラード空港に着いたままなんのアナウンスメントもなく八時間も待たされ、ようやくモスクワへ到着したのは深夜であって、なんとモスクワは不便で遠いところかと感じたのであった。

## 一抹の不安

それにひきかえ、今回はまったく予定どおりであって、前夜、旅行まえの仕事をかたづけるために少時間しか眠らなかったため、ア



# ★ソ連知識人



4月3日、故周首相の遺影や花輪を持って天安門前広場に集まった人々

の到着日と滞在日数を科学アカデミーに打電したものの、ソ連側からはなんの音沙汰もなかったのである。周知のように、一般のソ連旅行は、たんにヴィザを取得するのみならず、インツォリストを通じて事前に滞在費を支払い、ホテルのクーポンを入手してはじめて可能になる仕組みになっている。ところが、私の場合、先方の招待にたいして、こちらから電報を打っただけなので、一体、どうなるのかとの不安が残っていたのであった。出発前に、元モスクワ特派員を勤めた知人にこの件をもらすと、ヴィザが出た以上、絶対に受入れ体制は出来ているから安心してよいとのことであったが、果たしてどうかという一抹の不安にかられていたのであった。

## 招待客であるが故に

そのような心理状態のなかで空港の税関に並んでいると、旧知のクザジャン氏が私を探しているのに気がついた。クザジャン氏はアルメニア人の中国研究者で、今回私を招待してくれたソ連科学アカデミー社会科学術情報研究所の副所長を勤める重鎮である。見ると、クザジャン氏と一緒に同じく旧知のデリューシン氏の顔も見える。デリューシン氏は右研究所の初代所長で現在はソヴィエト東洋学のメッカ、科学アカデミー東洋学研究所の中国部長である。こうして、私の不安はどこへやら、旧知の学者に暖かく迎えられる、クザジャン氏が税関吏に一言話すと、それで税関もフリー・パスとなって、私のために用意されていた車でホテルへ向ったのである。当日

エロフロート機に乗り込み、動物園の熊の檻の近くにいるようなあの独特の臭気に、ソ連を肌で感じながら一眠りすると、もうモスクワに着いたという感じであった。

夕刻のためか、空港は人で混雑していた。が、私には、一抹の不安がないわけではなかった。それは、今回の旅行は、前二回と違って、ソ連科学アカデミーによる招待であるから、滞在費はソ連側の負担なので、例のイン

ツォリスト（ソ連の国营旅行社）の手を経ておらず、たしかにヴィザだけは在京のソ連大使館で取得したものの、モスクワへ着いてからどうなるのか、さっぱりわからなかったことであった。科学アカデミーからは半年も前に十二月から二月のあいだに来訪されたいという招待状が届いていたのだが、私の多忙のために旅行のスケジュールを決めかねており、本年になって、一月初旬に国際電報で私



は日曜日であったのに、そこまでゆきとどいた配慮があったことを知って恐縮したが、あとでわかったことには、私のヴィザは淡青色のもので、そもそも招待客用に区別されたものだそうである。一事が万事このような次第で、科学アカデミーの招待客となるとすべてがスムーズに運ぶ。一般の旅行者としてソ連を訪れたときの苛立たしさに比べて、その隔差があまりにも大きいのに驚かざるを得なかった。しかも、今日のソ連において、科学アカデミーのもつ権威は絶大なものであり、最近のソ連学術界の発展とともに、科学アカデミー付属の各研究機関は、自然科学であると

社会科学であると問わず、きわめて膨大な機構になってきており、ソ連社会における一つの知的・技術的な勢力体系を築きあげている観がある。モスクワのレニンスキー通りにある科学アカデミーの本部は、ツァーの時代の由緒ある宮殿を使っているのだが、その壮麗な雰囲気がこのような科学アカデミーの威力を示唆しているかのようであった。

ホテルは、科学アカデミー専用のホテル（科学アカデミー・ホテル）がレニンスキー通りの十月広場脇にあつて、このホテルは決して設備のよいものではないが、ここにはソ連の各共和国からの上京者や東欧諸国からの学者など、アカデミー関係者が投宿していた。

そのような次第なので、私の翌日からの予定は、すっかり出来あがっており、きわめてタイトなスケジュールが組まれていたのである。これも招待客なので、月曜から金曜日までには私専用に車が提供され、学術情報研究所に勤めるドナウエワさんという日本語の達者

な女性が通訳兼エスコート役としてつきそってくれ、本当に暖かく献身的な努力をしてくれた。ドナウエワさんは、モスクワ大学の日本語学科を卒業したのち、『朝日新聞』のモスクワ支局に秦正流氏のもとで勤め、ノーボスチの日本特派員であった御主人と一緒に滞日経験もある日本通の美しいロシア女性である。彼女は私の訪ソのために、事前に私の著書を手して読んだり、中国の固有名詞をロシア語に置きかえるための勉強をしたりで、準備のために大変な努力をしてくれたようである。

## 2

### ソ連における政策決定と情報

以上のような私的な体験を記したのは、このような体験のなかにソ連社会の一つの断面が表出していると考えたからにはほかならないが、私はモスクワ到着早々、もう一つの貴重な体験をした。

それは、ソ連における情報の流れを知るうえで興味深い体験であった。一般に共産圏諸国においては、コミュニケーション構造は顕教性と密教性との著しい二重構造を成しており、このことについては中国の場合に即して私もしばしば指摘してきたところである（拙稿「現代中国の社会的コミュニケーション」『放送文化』一九七四年六月号）および同『人民日報』と『参考消息』、『諸君！』一九七四年十一月号）参照。しかし、情報の流れやそれに基づく政策決定のプロセスについての具体的な状況については、一般にはほ

このような次第で、日本で感じた不安が恥ずかしく思われるような待遇を得たのであるが、モスクワでの日々は、社会科学学術情報研究所や東洋学研究所での講演、在モスクワ日本大使館での日本外交団と日本人記者団への講演、極東研究所、アメリカ・カナダ研究所での意見交換、モスクワ大学、モスクワ国際関係大学の学者との意見交換などが主なスケジュールであった、その内容はもっぱら中国の最近の情勢についての討議やソ連の中国研究、日本の中国研究についての学術交流であった。

とんど知られておらず、この問題は私自身にとっても重要な研究課題の一つであった（この問題については、拙稿「共産圏における政策決定と情報」、『国際問題』一九七六年四月号、参照）。

#### 一般的報道とは異なるチャネル

たまたま、私がモスクワへ到着した日が、中国で華国鋒が予想に反して首相代行に任命されたことが報ぜられた日であったことが、右の問題を解く手がかりを与えてくれた。すでに知られているように、華国鋒の首相代行任命は中国側が積極的に公表したのではなく、去る二月六日夜、香港の情報筋（遠東情報社）がこのニュースを入手し（中国側が意識的にリークしたのもと思われる）、翌七





華国鋒首相代行（当時）と会見するニクソン前米大統領

日朝、香港の中立右派系華字紙『明報』と政庁系中立英字紙『サウス・チャイナ・モーニング・ポスト』がこのニュースを最初に報じ、そのことを知った北京の外国特派員が中国当局に確かめたところ、中国当局がそれを認めるというかたちで判明したものであった。従って、このニュースが日本に届いたのは二月七日午後おそくであり、私はそのことを、ある新聞社からの電話で知ったのだが、翌八日の日本の朝刊は一斉にこのニュースを

報道したのである。ところが、モスクワ空港で私を出迎えてくれた二人の旧知の研究者は、ホテルまでの車中で早速、この話題に触れ、華国鋒問題をどう思うか、と私に質問した。やはり、ソ連でもこのニュースは小さなセンセーションをまきおこしているのだろうかと感じて私なりの意見を述べたのであるが、翌日、確かめてみると、ソ連では前日にはまだ華国鋒問題は一切報道されていず、翌日になって、はじめて

『ニューヨーク・タイムズ』の記事を伝えるかたちで報道されたのであり、『プラウダ』やタス通信が論評を加えたのはさらにその次の日からであった。こうして見ると、ソ連においても、科学アカデミーの重要な地位にある学者や専門家には、一般の報道とは異なつたチャネルによつて情報が流されていることが明らかであるように思われ、そのメディアが中国の『参考消息』のような外電中心の『内部新聞』であるのかどうかはともかく、日曜日であっても重要なニュースはやはり早速内部に伝達されるも

のと思われる。

ところで、タス通信や『プラウダ』の海外情報網を顕微鏡的な情報収集機関だとすれば、各地の在外公館は顕微鏡性と密着性を兼ねた情報収集機関であり、さらにKGB（秘密警察＝国家保安委員会）やGRU（参謀本部情報管理部）は完全に密着的な情報収集機関であるといえようが（なおKGBについてはジョン・パロン著『KGB』リーダーズダイジェスト訳へ上・下、リーダーズダイジェスト社、参考）、このような情報収集機構を通じて集められた情報はどのように政策決定に活用されるのであろうか。中国問題を例にとつた場合、ソ連の情報収集欲はきわめて貪欲であり、当然、台湾筋の情報も入手されているようであるが、同時に、日本の中国研究の動向や日本の中国報道についても、きわめて関心が高く、私の著書や論文もしばしば翻訳されたり、引用されたりしている。

### 誰が中国政策を決めるのか

さて、私は、今回のモスクワ滞在のおわりに近く、ソ連の中国政策の責任者であるカーピツァ氏との一夜を過ごした。カーピツァ氏は、ソ連の中国学界の実力者で、モスクワ大学教授として中ソ関係史の第一人者であるが、ソ連外務省にも籍を置き、現在はグロムイコ外相のもとで中国政策を直接に担当するソ連外務省第一極東部長の要職にある。カーピツァ氏はその多忙な職務のあいまをぬって、一夜、カリーニン通りに面したレストラン・プラハの特別室で私を招宴してくれた。

同席したのは、クザジャン氏一人のみで、通訳も交えずに三時間にわたって英語で話し合い、一九八〇年に期限切れとなる中ソ友好同盟条約をどうするつもりかなど、かなりつっこんだ討議をしたのであるが、その際に私は、ソ連における中国政策の決定過程について、思いきって次のような質問を試みた。私は、半ばカーピツァ氏に敬意を表すつもりで、

「カーピツァさんほどの中国問題の権威がソ連外務省の中国政策を担当しているのだから、ソ連の中国政策はカーピツァさんのところで決まると考えていいのだろうか」と問うたのである。

すると、カーピツァ氏は、意外に率直に次のように答えてくれた。

「いや、それは一寸ちがいます。西側諸国とちがってソ連の場合は、ポルト・ビュロー（党中央政治局）が決めるのです。ただし、私のところでポルト・ビュローに多くの政策を提案し、その大部分は採択されません。ときには上から指令があることもあります」

右のカーピツァ氏の答えは、きわめて率直なものであったような気がする。私はさらに、次のようにつっこんでみた。

「では、政治局で中国政策を決めるのは主に誰ですか。誰が中国問題に詳しいのですか」

この質問には一瞬の躊躇を示したカーピツァ氏であったが、ソ連外務省のなかでは幹部会のメンバーでもあり、かつての一九六九年九月の北京空港におけるコスイギン・周恩来

会談にも同席した氏は、この私の難問にたいし、

「それは、みんな中国には詳しい。とくにブレジネフさん、コスイギンさん、スースロフさん、グロムイコさんの四人が詳しい」

と答えたのが印象的であった。

全体的にカーピツァ氏は、中国の現状について、いわゆる上海グループ＝文革派が当面は勢力を得るであろうとの見方に立っており、鄧小平のリーダーシップについてはきわめて懐疑的で、鄧小平が後継体制を担うことは「絶対にあり得ない」と強く言明し、毛沢

### 3 ソ連から見た中国

私のモスクワ滞在中は中国が「走資派」に揺れはじめたときであっただけに、ソ連の中国研究者の中国の現状についての見方は、右のように文革派強しという点ではほぼ一致していた。とくに、党・政府の立場に近いと思われる学者の見解は、そのようなものであった。「走資派」批判は、むしろ毛沢東以後の

中国への文革派の危機意識から発生したものであり、従って、問題は、当面の批判の焦点に立つ鄧小平批判にとどまらず、そこには周恩来批判も含まれており、一方「走資派」ないしは実務派の潜在的基盤はかなり強固ではないかと思える私の見解とは、この点で大きく食い違ふことが多かったが、たとえば東洋学研究所などのリベラルでアカデミックな中国研究に徹しようとしている学者のあいだに

東以後の中国に集団指導体制が確立することもあり得ず、「ワンマン、プラス集団指導」だといっていた。

その「ワンマンとは誰だと思ふか」との質問には、「やはり上海グループから出るものと思われ、われわれは張春橋に注目している」とのことであった。

こうしてカーピツァ氏との会見は、氏がソ連の中国政策を直接担っているだけに、ソ連の中国政策を考えるうえで、きわめて興味深いものであったが、同時にソ連の中国政策の決定過程の一端を知り得たように思われて、この点でも印象深いものであった。

は、私の見解に同意する学者が多かったことも事実である。ソ連の学者のあいだにも様々な見解があり、またソ連の中国学界もけっして一枚岩ではないのだが、党・政府筋の右のような見解は、皮肉なことに台湾筋の見解とかなり近似しているような気もする。

#### 毛沢東路線の敗北を待つ

それだけに、当面、中国では、反社会主義的、反人民的な毛沢東路線が前面に出るであろうとみなしており、ソ連としては従来どおりの中国批判・毛沢東批判をつづけねばならず、ソ連の一貫した立場こそ正しいのだと彼らは主張するのである。やがて毛沢東以後の中国においては、必ずや毛沢東路線が敗北





北京・清華大の壁新聞 '走資派' を批判する

し、真正な社会主義権力が再建され、そのときには中ソ関係にも変化が生ずるだろうという見取図を描いているようであった。その日のために相手の出方を十分に見きわめ、待つ態度である。従って、ソ連は、今日の「走資派」や旧実権派を毛沢東勢力にたいするアンチ・テーゼとして考え、彼らとの関係を模索するのではなく、やはり毛沢東以後の中国に期待しているかのようであった。鄧小

平をはじめとする旧実権派については、彼らの認識がいかに毛沢東の対ソ感とは異なつてソ連を完全に敵視するものではないにしても、かつて六〇年代前半の中ソ論争の時期に鄧小平らの旧実権派としきりにやりあった過去が忘れられないのかもしれない。しかし、周恩来については、どの人びとも好印象をいだいているようであった。孫文研究でわが国にも知られているソ連の中国学界のもう一人の大御所、ティフヴィンスキー氏（モスクワ

大学教授）はやはりソ連外務省の要職にあつて（ソ連外務省史料調査局長）、六九年十一月から中ソ国境会談には、ソ連側代表団の一員として参加しており、現在は『近現代史』誌の編集長でもあるが、氏は王明、高崗、彭德懷、劉少奇、林彪ら中国の路線闘争の敗北者を毛沢東政治の犠牲者だとして列挙したとき、周恩来も同じく毛沢東の犠牲者だと語っていた。チフヴィンスキー氏の見解は、やはりソ連政府の見方を代弁するものであろうが、ソ連としては毛沢東亡きあとの周恩来時代にきわめて大

きな期待を寄せていたのではなからうか。それだけに、今回の「走資派」批判に周恩来批判の影がちらつきはじめていることを懸念しているようであったが、毛沢東がニクソン前米大統領をじきじきに招待するにいたったことなどについては、『反動的な者同士』の孤独な結びつきと見ているようであった。

### 中国こそ「覇権主義」だ

このような状況であるだけに、毛沢東健在中に中ソ関係が改善される可能性は、もはやあり得ないと見なければなるまい。ティフヴィンスキー氏は、平素、温厚な老碩学だといのに、去る十二月二十七日に起つたソ連のヘリコプター要員釈放事件（釈放に際し中国側はその非を認めるような声明を出し、そのうえ三名を手厚く招宴した）については、これを中ソ和解へのシグナルとはまったく受けとめていないばかりか、ソ連の一貫した正しい政策のまえに屈服せざるを得なかつた中国側が、卑劣にも西側諸国に向けて演出したものだとして、拳をふりあげて怒っていた。ティフヴィンスキー氏は、中国こそ、古来「覇権主義」だといひ、『近現代史』の最近号には中国が主張する「覇権主義」という用語を逆手にとつて「中国の覇権主義」について長大な論文を書いたそうである。全般にソ連は、最近の中国が、たんに内政上の不安定に直面しているのみならず、中国外交がインドシナ半島、アンゴラなどで相次いで敗北したことを中国の「覇権主義」の当然の帰結だとみなし、とくにハノイが北京から決定的に離反し



たことを指して、ハノイ北京間の角逐は、西沙群島や南沙群島など南シナ海の島嶼問題にも明らかのように、毛沢東主義の「覇権主義」が原因だと主張していた。たしかに、ハノイ北京関係が今日のような状況にたっただけに、中国にとっては打撃であろう。そこへもってきて、六〇年代前半に中国が当時の中国外交の戦略拠点と考えたキューバは、この二月のソ連共産党大会でのカストロ演説にも示されたように、いまや完全にソ連路線を歩みつつあり、同時に中国の「第三世界」外交を激しく批判しているのである。たとえば、アラブの石油闘争を天下大乱の時代の「第三世界」の正義の闘争とみなす中国の立場を、カストロ・キューバ首相は、去る十二月のキューバ共産党大会で激しく非難し、中国の立場はみずからが産油国であることに基づく大国主義的エゴイズムであり、「第三世界」とくに非産油国の立場をまったく無視した反動的な政策であると痛撃していた。こうしたカストロ首相の立場はソ連にとってきわめて好都合な援軍であり、このところソ連では一種のカストロ・ブームが沸き起っているほどである。一方、中国とハノイとの角逐をはじめとするアジア社会主義圏の流動と再編の方向には、その背景にアジアに広がる中ソ対立が存在しているだけにその将来が大いに注目されるが、中国との関係が緊密だと一般にはみなされていたカンボジアも、シアヌーク殿下の失墜のみならず、ハノイに近いホ

ー・チミン主義者の抬頭が当然に予想されるだけに、ソ連としては、そのアジア政策全体についてきわめて強気な展望を保持しつづけている（なお、中国とインドシナ半島諸国との関係などアジア社会主義圏の新しい国際関係については、拙稿「アジア社会主義圏の再編進む」、『朝日ジャーナル』一九七六年一月一六日号、参照）。

私には、このような状況のなかで、ソ連の中

## 4 ソ連の中国研究

こうして、中ソ対立は、まさに今日、中ソ冷戦とみなし得る状態になっており、双方とも激しい非難の応酬をつづけている。とくに、「走資派」批判のなかでの天安門前での衝撃的な大衆の「反乱」、急速それにといて強権的に対処しようとして鄧小平氏をステープ・ゴートにした中国指導部の危機的な状況を目撃しているソ連としては、中国非難の立場をさらに強めてゆくであろう。

### 現代中国学の重要性

だがしかし、だからといってソ連の中国研究がすべて政治的なプロパガンダのみかというかと決してそうではない。しかも、中国には、ソ連の中国研究に匹敵するソ連研究があるのかどうか、私は昨冬の訪中によってもついに確認できなかったが、ソ連の側には周知のような東洋学の永い伝統があり、中国研究の厚い層がある。もとより、ソ連の研究者のなかにも、依然としてステレオタイプ的の教義

国観を眺めていて、中ソ対立の根深さを改めて再認識せざるを得なかったし、当面、中ソ関係の改善はあり得ないとの感を深くした。つまり、毛沢東の死によって中国の内政に大きな変化が生ずるか、中国国内で毛沢東批判が起り、毛沢東体制がくつがえされてもしいかがり、ソ連の对中国態度には変化はあり得ないように思われた。

をふりまわす者、ソ連の政策がすべて正しく「毛沢東一派」がすべて誤っているといわんばかりの論調も少なくなはない。しかし、一般的にソ連の中国研究がきわめて水準の高い業績を蓄積しつつあること、そのような業績を産みつつある学者のなかには、真摯な学問的態度で問題をリアルに考えようとする人びとがかなり多いことも事実である。

思えば、ソ連の現代中国学界は、五〇年代の中国礼讃時代、六〇年代の中ソ論争時代と大きく揺れ動き、そのたびに政治の試練にさらされてきたのであるが、このような中国礼讃と中国非難の両極に動いた一時期の中国研究への反省のうえに、今日、新たな再出発を遂げたのだとも思われる。とくにソ連の中国学界のなかでは、党・政府の立場を忠実に代弁しているスラドコフスキー極東研究所長が一九七三年に、それまでの中国研究への「自己批判」をおこなったことも、象徴的な意味をもっているようである。

こうした経緯のうちに、ソ連においては現





ソ連共産党第25回大会。クレムリンを出る評議員たち

代中国学がいまやきわめて重要な学問分野を形成するにいたっている。もとより、それは、深刻な中ソ対立を背景にしたソ連の国家的要請でもあることは疑いないが、そうであればこそ、本格的な中国研究が必要になるのである。各学問分野を貫く学際的 (Interdisciplinary) な共通項として現代中国学がクローズアップされつつあるのだといえよう。

### 注目されている日本の研究

私が今回招かれたのも、このような状況を背景にしていたのであるが、私を最初の招待

学者として招いてくれた社会科学学術情報研究所 (所長・ヴノグラードフ氏) は、ソ連科  
学アカデミーのいくつかの研究所のなかでも、もともと新しく大規模な研究機関である。このユニークな研究所は、一九六九年にモスクワ市内に創立されたが、五年間の草創期を経て一昨年モスクワ大学に近い郊外の一  
角に超近代的なビルを建設して移転し、ソ連における社会科学各分野の総合的な資料・情報センターであると同時に総合図書館をも兼ねている。二階のホールには、図書目録がずらりと並び、大学院生などもここにきて図書や資料を探すことができる。情報ファイル、

関連論文のダイジェストなども整備されつつあり、社会科学の学術情報センターとしてはおそらく世界一の規模を誇るものであろう。

ソ連の中国研究機関としては、永い歴史と伝統を誇り、今日でもきわめてリベラルでアカデミックな立場を貫こうとしている東洋学研究所 (所長・ガフーロフ氏)、それとは対照的に現代の中国・アジアの諸問題を意欲的に研究し、党・政府の立場にかなり忠

実な極東研究所 (所長・スラドコフスキー氏) が従来は二つの大きな存在であり、さらに国際労働運動研究所や世界経済と国際関係研究所、アメリカ・カナダ研究所などにも何人かの研究者がいて活動をつづけているが、右の社会科学学術情報研究所は、東洋学研究所と極東研究所の中間の第三の位置をとりながら、現状分析的な中国研究のセンターになりつつあるといえよう。もとより、この研究所は規模が大きいので、中国のみならず各地域、各分野の研究もすすめられている。

私が右研究所の雑誌室に案内されたとき、一人の女性が『東洋経済』と『エコノミスト』を机上にひろげて、日本の景気動向についての記事を読んでいたし、新刊室では一人の朝鮮人女性が『韓国文化年鑑』を分析していた。最近、韓国からソ連科学アカデミーに図書が寄贈されたことが小さなニュースになったが、おそらくそのような図書なのであろう。

ところで、ソ連の中国学界は、このようにシステマチックな研究体制を保持しているけれども、中国にかんする第一次資料や文献については、どことなく不十分の感を受ける。それだけに、日本の研究動向や中国情報に注目していることについては先にも述べたが、この点からしても日本の中国研究や中国報道は、つねに厳しい試練にさらされているのだともいえないではない。

二週間のソ連滞在は、こうして改めて日本の中国研究のあり方を様々な角度から考えさせられた旅でもあったのである。

(なかじま・みねお)